HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	佐々木味津三試論 : 初期作品について
Author(s)	神谷, 忠孝
Citation	北海道大学人文科学論集, 13, 1-11
Issue Date	1976-03-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34324
Type	departmental bulletin paper
File Information	13_PR1-11.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

佐々木味津三試論

――初期作品について――

神谷忠孝

一

佐々木味津三は昭和九年二月五日、三十八歳で没した。今東光は『東光金蘭帖』（中央公論社、昭34・11）の中で、味津三が臨終の言葉として夫人にむかって、「俺は、兄貴の借財を背負ったため、純文学への想いを絶って、大衆小説で金を稼ぐことを思いついた。幸に『右門捕物帳』その他が当って借金は返却することが出来て不義理をせずにすんだ。世間では味津三時代などと言ってくれるが、どうやらその味津三時代も終りそうだ」と言ったと書いている。純文学に未練をもちながら、やむなく大衆小説に転じて名声をはせた味津三の生き方を、今東光は肯定的に書いているのだが、一方、高見順の『昭和文学盛衰史・一』（文芸春秋新社、昭33・3）には、「『純にして小ならんよりは、雑なりとも大なれ』として大衆文学に陥沈してしまった佐々木味津三の姿は、いたましい」と書いている。この二人の発言から大衆文学と純文学の断絶の深さを窺いしることができるわけだが、それはともかくとして、味津三の純文学とは何かを考察してみることも興味あるテーマである。また、派生する問題として、新感覚派における味津三の特異な位置ということもうかびあがってくる。

「佐々木味津三遺文集」としてまとめられた『落葉集』（昭44・2・私家版、発行者・佐々木克子）には、年譜と作品略年表が載っていて、佐々木味津三文学の全貌をしることができるが、その大正十五年の項には次のように書かれている。

> 四月二十五日、遂に兄永眠。三十六歳。臨終に際し弟妹三人と、遺児（五人）の教育他後事を託される。兄は好人物で味津三の窮迫時代には快よく援助を与え、また村のために私財を以って診療所を設けたりしたが、診療所は失敗、その他の事業にも失敗し多くの負債を残した。味津三は約一ヶ月郷里に滞在し善後策を講じたが、全財産を投げうっても負債が果せぬと知り、自らの力でせめて弟妹遺児の養教育を果そうと決意、収入の少ない純文学を諦らめ、大衆小説に転向の覚悟を決める。

この年譜記載のとおり、昭和に入ってからの味津三の活躍の場は大衆娯楽雑誌に移っている。しかし、急に大衆小説を書きはじめたのではなく、大正七年に創作をはじめて以来、純文学、大衆文学、童話が同じような割合で書かれており、純文学の方の評判より大衆文学の評判の方が高かったというのが真相である。そこで、味津三の純文学をどの範囲に限定するかということになるわけであるが、単行本の『呪はしき生存』（金星堂、大13・5）、『兄馬鹿』（春陽堂、大13・5）、『二人の異端者』（聚芳閣、大13・9）、『文芸猥談』（聚英閣、昭2・11）に収録されている作品がひとつの目やすとなる。(注1)それと、死後刊行された「佐々木味津三全集」全十二巻（平凡社、昭9・4～10・3）のうちの第11巻『創作集』に収録された作品が、単行本と大部分重複しており、これらが味津三の純文学代表作とみなすことができる。(注2)その『創作集』の「巻末に」には鈴木彦次郎の次のような文章がある。

○佐々木味津三全集第十一巻を編むにあたつて、私共は、甚だ困惑いたしました。私共といふのは、未亡人から、この巻に収むべき故人の純文芸作品の選定を委嘱された田中貢太郎、尾崎士郎・榊山潤・鈴木彦次郎の四人であります。

○なぜ困惑したか。――故人の純文芸作品を、全部収録しようとすれば、殆どこの巻の三倍に近い頁数を要します。しかして、いづれも、省くに惜しい作品のみです。且つ故人は、大衆物に於いても、その傾向を明らかにしてゐるやうに、純文芸作品に於いても、多奇多才。――その各方面の代表作を網羅しようとすれば、故人の本領ともいふべき優秀作の幾篇かを犠牲にしなければなりません。

○ここに至つて、私共は、未亡人並びに故人の義弟山崎海平君とともに、数回、熟議の上、やむなく、真に故人が把持してゐた芸術観に最もふさはしいものと、私共が信ずる作品中から、以上を選定して、収録することに致しました。

こうして編まれた『創作集』の作品選定はほぼ妥当であり、発表当時批評の対象となったもの、あるいは味津三自身が愛着をもっていた作品が網羅されている。それらを通して味津三の純文学における特徴を大まかに分類すれば二つの傾向に分けられる。一つは、人間の関係を濃密に追求した諸作品であり、味津三文学の顕著な特色があらわれている。それらを分けてみると、夫婦（「呪はしき生存」「うら門」「名刺」「行燈夫婦」）、兄と弟（「地主の長男」「聚雨」「兄馬鹿」）、兄と妹（「どぜう」「山羊！」）、姉と弟（「姉の問題」「袴」）、兄と義妹（「被征服者」「三十二の秋」）、義姉と弟（「壺」）、義父と子（「糸瓜」）、母と子（「母の上京」）、父と子（「父親の鼻」「とかげ物語」）、父と娘（「外孫」）というように、一貫して肉親の葛藤がテーマとなっている。このほかに三角関係を扱った「寂しき復讐」「二人の異端者」などもあり、このほかの時代小説においても、味津三の関心は肉親ものにむけられている。

もうひとつの特徴はテーマ小説ともいうべき諸作品にあり、こち

らの方にはあまりいい作品はないが、「一茶の焦燥」「寂寥」「お鷹匠の縊死」「金一封」「枇杷」「乞食」「傷供養」「京太郎の場合」「二兎」「ほくろ」などがある。このテーマ小説には、ユーモア小説と性格の悲劇を主題としたものがあり、才能の豊富さをものがたっているが、器用すぎるところが味津三にはマイナスとなったのではないかと推測される。『文芸猥談』所収の「自力主義」の中で味津三は、

私はこれまでいろいろな人からいろいろなレッテルを戴いた。小泡鳴といふのがその一つである。小宇野といふのが其二つである。小菊池といふのが其三つである。思ふに私の文章経営がシニカルであつたが為めに小泡鳴といつたに違ひなからう。又私の書くものがペーソスとユーモラスをねらつてゐるが故に小宇野といつたに違ひなからう。同様に私がテーマ小説をものするが故に、小菊池といつたに違ひなからう。

なんといふ出鱈目なレッテルである事か。又なんといふ不見識なレッテルである事か。

というように、当時の批評に反撥している。また、「一たい今の文壇は事毎にろくでもない偶像を造りすぎるかの感があるのは、不届至極である。又ろくでもない偶像を崇拝し過ぎるかの感があるのは重ね重ね不愉快である」とも述べて、既成文壇作家への不満を表明している。

味津三は初期の頃、かなり多くの評論を書いているが、そのほとんどが既成作家への痛烈な批判であり、谷崎潤一郎・里見弴・有島武郎、「新しき村」、社会主義文学などへの批判は今日読んでもまともであり、味津三の視点のたしかさが窺えるが、その批判が直情的であり露骨であったために、その反動として、風当りも強かったと思われる。『呪はしき生存』の「序」で菊池寛が、「佐々木君の小説は、序文なしにも、立派に通用する丈の資格を持つてゐる。孰ちらかと云へば、もつと早く世の中へ出てゐる筈の人だと思ふ。『呪はしき生存』などは、もつと認められても、いゝものだと思ふ。たゞ、佐々木君は、青年にして、既に世を拗ね、白眼文壇を、睥睨してゐたゝめ、作家としては、不遇の道を歩いたのだらうと思ふ」と書いているのは、主として評論のことを指していると考えられる。

ここでいわれた「既に世を拗ね、白眼文壇を、睥睨してゐた」という見方は、菊池寛のいたわりの言葉と考えられるが、味津三はポーズとして「世を拗ね」ようとしたことが、「文芸春秋」に連載した「文芸猥談」を読むとはっきりする。だから、川端康成が「『呪はしき生存』を読む」（「文芸春秋」大13・7）で、菊池寛の序文をふまえながら、「しかし作品では佐々木氏は必ずしも世を拗ねてはゐない。徹頭徹尾拗ね通してゐるのではない。氏の人世観も白眼世を睥睨したものではない。人生に対する辛辣な刺笑は殆ど見当らない。心境は寧ろやさしいユウモアである」と書いている方が真実に近いようである。問題点は、評論やエッセイで「世を拗ね」てみせながら、創作では人情家でしかなかったというところにあるようだ。しかし、片手落ちにせよ、既成文壇に反旗をひるがえすところで出発した味

津三の新しい文学への意欲は並々ならぬものがあったことはたしかであり、「文芸春秋」の同人を経て、「文芸時代」の同人に参加した理由は、その反骨のせいであったと考えられる。

二

佐々木味津三の文壇的処女作は「馬を殴り殺した少年」（「大観」大8・8）である。性による性格の転換、凶暴なものへの憧憬をテーマとした作品で饒舌体のひきしまった文章で読ませる。十七歳になる清二は屠場の丁稚で、ある日二人の兄貴分から色気づいたといわれたのがきっかけで、女を女房にするとはどういうことかを考えはじめ、知っている限りの女を心の中で思いえがき、性の妄想にとらわれる。兄貴分たちの屠殺の様子を一度見て、自分にはどうしても可愛いい馬を殺せないと思いながら、明日は殺されるかもしれない白馬の手入れをしているとき、三十歳になる内儀に誘惑されて性を体験する。その途端に清二の性格がかわり、次の日、自分からすすんで可愛いがっていた白馬を殺して、その血をすすり、残忍な気持が高揚する、という筋である。

この作品はテーマ小説といってもよいが、やさしすぎる感性を変革したいという作者の願望がこめられている点では、少しあとに登場する横光利一の「日輪」や「蠅」と同じような意味をもっている。当時の文壇は、谷崎潤一郎や芥川龍之介がいたとはいえ、まだ白樺派や奇蹟派の人道主義的、人生派的な傾向が主流としてあったわけで、そうした既成文学への挑戦という点で「馬を殴り殺した少年」をとらえると、佐々木味津三の意図は明瞭になる。だが、味津三の資質は、のちの作品が示すように、人生派的傾向が強く、抒情性を人よりも濃くもっていたことを考えると、「馬を殴り殺した少年」は、無理して抒情性を封じこめようとした作品だったことはたしかである。こうした傾向は「文芸時代」同人の何人かについてもいえることだが、文学による資質への反逆を試みることで、新しい文学を構想しようとしたところがあり、新感覚派を考えるとき、単に文章の面からだけ考察するのは片手おちとなるのである。

続いて発表した「一茶の焦燥」（「新文学」大8・10）は、味津三の文学的力量が発揮されている作品である。一茶をモデルにしてユーモアとペーソスをもりこんだこの作品は当時反響を呼び作家的地位を確立させた。内容はこうである。覇気をもてあまし世間を棄てようと思っている竹阿（一茶）が、奇行をかさねることで世間から見棄てられようとするが、奇行がことごとく評判となって門人がふえてしまう。男の子をおいて妻が去ったので子を里子にだすが、まもなく死んだというのでかけつけると、養育料ほしさの詐欺に子が犠牲になったことを知る。世間にだまされたと知って泣きながら子を葬っているうちに、一茶は「馬鹿者の様に至極けろりかんとみのうちが、すつかりからつぽになりきつた明るさを、心に感じ」るところで小説は終わっている。

この作品では世間というもののきまぐれ、たよりなさということがテーマとなっているが、味津三の主題に即していうと、隠遁への

憧憬が根底にあるといえる。しかもそこにはありあまる覇気があるからこそ、世間を棄てようという気になるのだという、独特の隠者解釈が示されており、二十三歳の作者にしては早熟な人生観であるといえる。味津三の特徴は早熟ということであり、私見によれば、年とともに文学の質は下降をたどっており、大衆文学への転換も、経済的理由はおもてむきのことであって、文学的ゆきづまりが真相であったと思われる。このことは、新感覚派の中で短命にして世を去った池谷信三郎や十一谷義三郎についても同様のことがいえる。

文壇的出世作といわれる「呪はしき生存」(「報知新聞」大9・1～?)は、生存そのものへの懐疑、子を持つことへの怖れをテーマとした作品であるが、実存的人間認識という深みには達していない。貧困と病苦からくる生きることへの怖れが、主人公の性格の弱さとあいまって、中途半端な作品に終わっており、発表当時評判になったことが不可解であるが、よくも悪くも味津三の資質が露呈していることはたしかである。

簡単にあらすじを書くと、親の反対を押しきって結婚した夫婦がいる。男は新聞社を解雇され、米代にも事欠いて郷里の父に手紙を出すが返事もこない。臨時の仕事にありついて無理しているうちに結核が悪化し喀血してしまう。そこで妻が卵売りで家計を助けることになるが、段々と妻の態度がかわり、男はたえられないと思うようになる。ある日、一匹の犬が迷いこんできたので男がかわいがると妻はいやがる。しかし、犬が子をはらんでいることがわかると妻がかわいがるようになる。病気も快方に向ったので男は仕事につき妻の卵売りをやめさせる。ある夜、犬の世話をしすぎたのが原因で妻が高熱をだし、犬がお産をするところをみたいといって、妻は気狂いじみたふるまいをする。犬のお産が終わったあと、妻が妊娠し、男は貧乏と病気のゆえに子供をほしくないと思うが、妻は大喜びで、郷里の義父に手紙を出し、孫ができるということで父が上京し勘当がとけるが、男は自分が呪われていると感じ、何物ともしれぬものへの殺意をおぼえる。これが作品のあらましである。

この作品はほとんど虚構であるが、新聞社を解雇されるところや早い結婚と貧乏、それに喀血などは体験に基づいている。父は大正二年、味津三が十八歳のとき亡くなっているので勘当の事実はありえないが、味津三の作品に肉親との葛藤を扱った作品が多いことは興味深い。年譜をみても家庭に問題があったという事実はないにもかかわらず、血縁のからみあいをもっぱら題材としたということは、味津三の資質が自然主義文学の系列上にあったことを物語る。新感覚派の中で諏訪三郎とならんで人生派といわれるのも、(注3)題材の点からみて当然といえるが、肉親との不和、夫婦の危機を扱っても、それの解決法として別の事件や人物をもちだし、徹底的な究明を避けてしまうところが欠点である。そうした中にあって成功しているのは「地主の長男」(新小説」大10・4)と「どぜう」(「蜘蛛」大10・7)である。

「地主の長男」は、村にとどまって正直に生き、村の世話役として確実に生活する長男の眼を通して、大学まで出してやったのに生活が安定せず、金の無心ばかりする次男とを対照的に描いた作品であ

る。この作品の成功は、村に生きる人たちの暮らしぶりが写実的に描かれている点、誠実に生きている長男が戦場にかりだされてしまうところなどが哀感をこめて書かれている点であろう。読みようによっては反戦小説といえる面もあり、大正十年の年譜に、「生田長江の紹介で『新小説』四月号に中篇小説『地主の長男』を発表、好評を受けた。これを出世作として記念するため、生田長江を中心とする冬日会主催で『地主の長男の会』が根津娯楽園で開かれた」と書いてあることもうなづける。佐々木味津三の作品の中から代表作を一つ選ぶとすれば、「地主の長男」だということができる。この作品はおそらく、実兄をモデルにしていると思われる。兄への敬愛が根底にあって、その兄から自分をみるとどうかという想像力をはたらかせて書いたところに成功の要因があると思われる。執筆の動機に必然性があり、体験や見聞を基盤においているときいい作品が書けたということは、味津三の自然主義的資質を証明しているが、逆にいえば新感覚派のグループにあって新しい文学を創造するには限界があったということになる。

「どぜう」は「文芸時代」の「同人処女作号」に再掲載された作品である。編輯後記には、「必ずしも処女作ではないが、同人が無名作家であつた時代のもの、又は、さういつた意味で再び顧みたいやうなものを集めてみた」と書かれている。味津三が「どぜう」を選んだ理由を作品の内容に即して考えてみると、この作品は味津三にしては珍らしく泥鰌を象徴的に使っていることである。山林地主を父にもつ兄妹がいて、兄の方は妻が離縁を申しでて実家に帰ってしまっている。妹は兄の妻（義姉）の弟と恋仲であるが、父親は嫁への腹いせもあって、二人の仲を認めようとしないばかりでなく、妻に逃げられるような息子に身代を譲れないとまで言い出し、山林の木を安値で売りはじめる。こうした家の崩壊を背景に、兄の妹へのいたわりが話の中心であり、兄が東京にいる恋人のところへ妹を父に内緒で発たせようと決心するところで小説は終わっている。妹の結婚を実現させてやろうと決心したあとの文章は次のようである。

その日中のさなかを、私はクリクリ坊主のいが栗頭をむき出しで、しかしでたら目に、鰌池の方へ歩いていつた。

ちいさな、すのこ張りの池の中には鰌たちがプクリと浮いて来ては、又、プクプクと沈んでは、さかんにはめをはづしてゐるのであつた。

そして私は、ピイピイとむやみやたらに、口笛をふいて池のまはりをのそのそとうろつきまはつた。

ここでは男の不安な心理と、「はめをはづして」泳ぐ鰌に妹の前途への思いをこめる心情が巧みに表現されており、象徴性をねらった作品だということができる。味津三が「文芸時代」に発表した小説は「どぜう」を入れて七篇であるが、表現上に工夫をこらしたとみられる作品は「どぜう」以外にないことを考えると、「どぜう」への愛着が了解できる。

「文芸時代」に発表した作品で比較的に成功しているのは「下駄の

写真」（大14・7）である。同じ部屋に下宿している二人の大学生の対照的な性格を描いたもので、もって生れた気の弱さから好きな女を口説けない男の悲哀がうまくでている。味津三の作品で佳篇といえるものは、弱い性格に悩む人物を登場させた作品であるといえるが、このことは味津三の本質と関連していると考えられる。評論やエッセイで、異常に攻撃的になったり、ことさら斜にかまえたポーズを誇張したりするのも、自己の性格の弱さを隠蔽するための止むを得ぬ方法であったわけで、大衆文学に転じたことも、表面的な理由はともあれ、味津三自身の内部では必然性をもっていたと考えてよいだろう。

二

佐々木味津三の人間像については、死後、新聞雑誌に掲載された回想と追悼文を集めた『甘棠集』（私家版、昭10・3）、および尾崎士郎の『人生読本』（学芸社、昭16・11）などで描かれているが、生前の作品評にしぼってみると川端康成と横光利一の文章が代表的である。この二人の批評から、「文芸時代」同人に味津三がどうみられていたか、そして、味津三の独自性がどこにあるかをさぐってみよう。横光利一は「文芸時評」（大13・3、発表誌不明、河出書房版全集第十一巻）で、味津三の「志士」（「新小説」大13・2）をとりあげながら、「私はこれを読みかけて中途で最初はよした。何かこれは失敗してゐるにちがいないと云ふ感じが閃いたからである。私はその失敗を見とどけないことにした」というようなことを書き、「呪はしき生存」にふれて次のように批評している。

> 『呪はれたる生存』はなかなか良いと思ふ。肺病で職を奪はれ、送金はなくなり、妻と二人でどうすることも出来ないと云ふどん底的生活の中にゐてさへも、あれほども純心な嫉妬を忘れずに大に怒り、血を吐きながらなほ可憐に主人公をして痴情と戦ひ続けさすと云ふ筆端の心境が殊の他に面白い。どこかラムのやうだ。尊い作だ。気品などは少しも心がけない所に大きく延びる童心があり、不思議な気品がその心境から流れてゐる。とにかく作者はもつと大切にさるべきである。気品気品と云つて気品の何物かさへ知らない者達から気品のない作家として取り扱はれ過ぎている此の作者の気品こそ、我々を快活にその日の憂鬱から救ひ上げてくれるものであらう。しかし、此の作者に一言したいことはテーマなぞを頭に入れて貰ひたくないことである。芸術的にはぐれていつてもらいたい。気品気品と何事につけても気品専一と柄にもない用心をする若人達の軆ては自分の気品に石のやうに固って了ふに違ひない間にあつて、かくも滔々として溢れて行く作者は独特の面目を放つてゐる。

横光利一の批評は好意的であり、味津三のもっている純情を肯定するとともに、格調の高さを目的とせず八方やぶれをねらっているところを評価しているようだ。そして、今後の方向として「横には

ぐれていつてもらひたい」と述べているところは重要な提言であるが、味津三は横光の期待を裏切る方向で、テーマ小説を多作したことで、純文学の戦線から逸脱してしまったということができる。

川端康成が「佐々木味津三氏の『呪はしき生存』」（「文芸春秋」大13・7）で展開している批評は、味津三文学の長所と短所を的確にいいあてており、川端康成の読みのたしかさを窺わせる文章である。川端はまず、「佐々木味津三氏は異色ある作家である。独自の世界に住む人である。元来が佐々木氏は性格乃至気質の作家であると思ふ。その性格乃至気質の描き方に、氏の異色があるのだと思ふ。佐々木氏の作品は、一人称小説であると三人称小説であるとに拘らず、常に主人公一人の心持のみ辿つて、筆を進めてゆく。この叙述と展開とに氏の特色がある」と述べ、味津三が好んで親子、兄弟、夫婦間の愛のきずなを題材としながら、「奇異な道徳観なぞを振りまはしもしなければ、感覚に淫するやうなこともない。まともな感情の道を歩いてゐる」という点を評価している。そして、味津三が生活に強い人間よりも弱い人間を選び、生活に弱い人間が不幸を、「快活な融和的感情で忍び、この薄雲の彼方の明るい点に出ようとするのが、多くの作品の主意であるらしい」というように、その特徴をとらえている。

しかし、「呪はしき生存」にふれて、この「作品に現れた生存が果して呪はしき生存であるかどうかは疑問である」とし、「何故なら、作者は不幸の中に幸福を見出さうと努め、人間を闇の中に置去りするに忍びないらしいからである」というように、味津三の描く人間像の不徹底な点に対して物足りなさを指摘した。そして次のように述べている。

佐々木氏はこの性格乃至気質を持つ男を描くことに楽々と成功してはゐるが、性格乃至気質の素因を深くは反省してゐない。また、さう云ふ男に人生を見る特異な眼を与へてはゐない。性格の創造が人生観の創造を伴ふところまで行つてゐない。だから、佐々木氏の作品で人を動かすのは、この性格の特色でなくて、この性格が触れる世間尋常の愛である。そして作者独得の性格乃至気質と諧謔と機知に富んだ才筆とは、究極に於ては、おとなしい人生観照に風変りな色彩をつけて、一種狂ひ咲き的の風格を生んでゐると云ふべきであらう。

しかし、作品の文字面の軽い味に拘らず、作中の主人公は何か重い影を曳いてゐる。それは、世の圧迫に対する弱い反撥、稍古風な自負と自嘲の混合、退嬰的な潔癖、性格的寂寥感に根を持つ周囲に対する求愛心などであらう。

この批評は佐々木味津三の文学を、長所と短所を含めて過不足なくとらえているものである。そこには「文芸春秋」の同人同士という配慮もなされているとはいえ、「性格の創造が人生観の創造を伴うところまで行つてゐない」というような痛烈な批判は、仲間意識にこだわっていては書けるものではなく、川端康成の読みの正確さがほとばしりでている文章だといえる。

「呪はしき生存」に対する横光利一と川端康成の批評を中心に、佐々

木味津三の文学的特徴をうきぼりさせてみたわけだが、この二人の味津三に寄せた期待、提言を味津三がいかすことができたかできなかったかということが次に問題になるわけであるが、残念ながらこれという作品はみあたらない。書き下し長篇『二人の異端者』（聚芳閣、大13・9）は、二人の中学生の生き方を、学校に反抗しての無期停学事件、年上の女との恋、友人の死といった事件をつなげて書いた青春小説であるが、題材を若き日への回想にとったために、性格の創造という新しい分野を開拓するに至っていない。というより、味津三には人間の精神的成長、つまり自己への関心よりも弱い性格を持って生れたことを宿命と思い、その宿命に耐える人間に対する興味が強かったというのが真相のようである。そのことはたとえば「文芸時代」の創刊号に発表した「つぐみ狩」という作品によくあらわれている。

「つぐみ狩」は小品という扱いで創作欄から省かれているが、味津三文学の中では重要な位置を占める作品である。関東大震災の直後、三人の友人と笹暮峠につぐみ狩にでかけた話であるが、その峠には「私」の遠縁にあたる青年が、「世を棄て人を棄て志を棄て」ひとり小屋を建てつぐみをとって生活している。その青年が久しぶりに会った友人たちの来訪を喜び、山中での生活の寂しさを俊寛のようだと語り、皆が帰るとき途中まで送ってきて別れるとき、「おーい！返へせい！戻せい！その船返へせい！」と冗談とも本気ともつかぬ叫びをあげるところがクライマックスである。この青年の過去について「私は」次のように回想する場面がある。

> 東京の学校を終へた時どうしても帰郷はいやだからと言つて、色々と駄々をこねにやつて来たのはなにをかくそう私のところであつた。今の妻君と結婚がいやだからと言つて最づ先に泣きついて来たのは私のところであつた。結婚してから友達の妹と恋に落ちたから、どうしても妻君を離別すると言つて、眼色を換へ乍ら私のところへ駈けつけたのもまた彼である。私はその孰れをも頑として斥けた。多感多情物に感じ易い彼の一身を少しでも健全な位置に安んぜんために、奔馬の絆を切り放したやうにどこまでも熟し過ぎる彼の思想を幾分たりとも冷静堅固に導かんために、私はつねに面を犯して彼に叱責の鞭を加へた。

ここには社会不適合の人間への同情と共感があらわれており、味津三が創作の際とりあげる人間像と共通点をもっている。そして「私」なる主人公は、性格はいかようにしても変革は不可能であり、人間は宿命に耐えるしかないという観察者の立場にたっている。この「私」に味津三の人生観をあてはめてみると、味津三が文学で主張しようとしたことの何であるかがわかりかけてくると思われる。つまり、社会に適合できない人間、人と人との関係において弱い立場に立たされる人間の生きる道は、自己の弱さを自認することだという、いわば「負けるが勝ち」の論理である。初期の作品のうち「馬を殴り殺した少年」には弱い立場にいる人間が強い性格を持とうとする意欲が書かれ、「お鷹匠の縊死」（「女性改造」大11・11）には馬

鹿にされ通しの男が死をかけて復讐する話が書かれたが、それ以後の作品には、「つぐみ狩」や「下駄の写真」にみられるような「諦観」が読みとれるのであり、このようにみてくれば、味津三の初期作品には、創作を通しての人間社会観の達成が認められるのである。その方法が平凡であり、主張も何ら積極性をもちえなかったために注目されることはなかったが、味津三の内部に即してみれば、大正末年の変革期に自己の立場を確立しようとした軌跡がたどられることはたしかである。

四

佐々木味津三は「詭弁五ヶ条」(「新潮」大14・2)の中で、当時の「文芸時代」同人をひとしなみに新感覚派とする一部の風潮に対して異を唱え、「同人の中に新感覚を唱へるものが散見するから、その雑誌に連坐するものは、悉く新感覚派であらう、と言ふやうに驚くべくも勇敢な観方をされる人があるやうであるが、言う迄もなくそれは最も軽蔑すべき論理である」と述べている。また、新感覚派への期待と批判を次のように書いているが、これは「文芸時代」同人同士の意見として貴重である。

私は無論新感覚派のなにものであるか、不幸いまだにそのよつて来たるところをつまびらかにしない。

若しその唱えるところが、新らしい感覚によつて未発見未発掘の唯一独歩な新らしい内容を掘りさげると言ふのであるなら、おそらく私とてそれを承認するべくなに人の人後にも落ちない一人であらう。

だが、その主張するところが、先人未発見の処女鉱脈を内容に発掘することでなしに、善を悪に、悪を善に置き換へることでなしに、遠く内容から離れ去つて、「四角」と言ふ文字の代りに、「四つの角の投擲」と言ふがごとき程度のものであるとするなら、或は「丸」と言ふ言葉の代りに、「無限多角形」と言ふがごとき単なる文字言語の上の玩弄遊戯乃至は作り替のみに終始するものならば、説明を俟つ迄もなく私は到底その種の新感覚派には左袒出来ない一人である。

ここには期待が半ば裏切られたことへの残念さがでており、味津三が新感覚派に冷淡であった理由が表明されている。少しあとのところで味津三は、「要はその核心が、いかに人生を誘拐し、どれだけわれわれを脅やかし、いかほど人間を陶酔さすかの問題であらう」と自己の文学観を述べ、「はつきり言つておくが、私は新感覚派でもない。旧感覚派でもない。その核心主義者である」と結んでおり、味津三のこの意見は新感覚派の崩壊をも予言しているという点でまともである。

「文芸時代」同人の中にあって、味津三と同じような態度をとったのが十一谷義三郎である。「近頃断片」(「文芸時代」大14・2)で十一谷は、「僕は、一時の便宜のために現在のみならず将来の制肘を受

けるような名称は一切御免を蒙りたし」と述べて新感覚派に消極的態度を表明した。十一谷の文学観は「文芸時代」創刊号の巻頭に載せた「作家の世界」の中に示されており、そこでは、人間が社会的存在であることはたしかだが、絶対個人の領域もまた存在するわけで、自分はその個人における内面劇を書くのだという立場がうちだされている。この文章が創刊号の巻頭に載っているということは、同人の総意の集約と考えてよく、その初心を最後までつらぬいた作家として十一谷と味津三の存在は貴重であったということができる。横光の「頭ならびに腹」の冒頭の文章、それを誇大に宣伝した片岡鉄兵の「若き読者に訴ふ」によって、「文芸時代」は出発当初から横道にそれてしまい、横光・片岡のペースに多くの同人も同調していった中で孤塁を守ったために流行に乗ることができなかった同人の存在も、新感覚派の裏面史として考察に価するだろうと思われる。

さらにいえば、味津三が性格の弱さの悲劇をモチーフとしたのに対し、十一谷はもっと強烈に、性格破産者の悲劇をモチーフとした作品を初期に書いている。[注4] そこで追求されている社会不適合者の悲劇は、作家個人の私的理由から発しながら、大正末年から昭和にかけて問題となった「時代の不安」に対し、文学的に解決法を見出そうとした態度であったこともたしかであり、新感覚派の別の側面として考察しなければならないだろう。一九七六・一〇・八

注

注1　『呪はしき生存』（呪はしき生存・行燈夫婦・お鷹匠の縊死・姉の問題・被征服者・寂寥・名刺）。『兄馬鹿』（兄馬鹿・父親の鼻・どぜう・地主の長男）。『二人の異端者』（二人の異端者・母の上京・寂しき復讐）。『文芸猥談』（つぐみ狩・二兎・外孫・とかげ物語）

注2　第一部（馬を殴り殺した少年・呪はしき生存・地主の長男・うら門・行燈夫婦・徳人・三十二の秋・糸瓜・母の上京・驟雨・ほくろ・一茶の焦燥）。第二部（寂寥・柿盗人・袴・被征服者・金一封・枇杷・乞食・山羊・傷供養・壺・紙鳶）

注3　山室静「モダニズムの流れ」（角川文庫『昭和文学史・上巻』（昭31・4）

注4　拙稿「十一谷義三郎論」（「中央大学文学部紀要」七十一号、昭49・3）